



170 180 190

4 5 6 7 8 9

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

180

170

160

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

竹窓玄吉大人遺意

蓬廬青之山人著
蕙齋紹真臨圖

書畫
精造

時代俳家奇人談

江戸新版

文化十三丙子秋

文生堂
慶元堂

刊刻出来

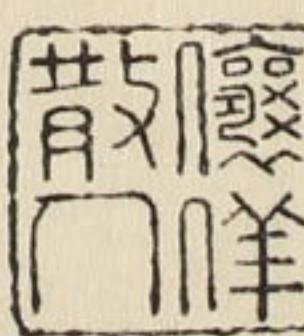
仙鶴堂

刻俳家奇人談序

曩小閑田子近世畸人残集錄一載て空也よ洋り
古玉來老よりといへども復そ其盛を継ぐものあ
竊乎惟みるに承正天文の比小守武宗經比清操
あ利寛承正保君冲より貞徳季吟の草翠あり延
宝元祐の聞小宗因桃青比遼群より且全一而武
東室玄圃を松伝徳言比其角嵐寄玄東丈竹支芳
許六北枝燈翁來山鬼叟乙由不角承松淡淡等比つ事
あくまでも小雅出する所の極ふとも亦その人ふと

いふ迄うゞば甚よ味人玄玄一達稿あり俳奇哉好む
者の為小轉す体より八十有餘後昔尤要くゞや古人
れり肺疾舉てありを知一め又名匱に至風韻の変
を識すかゆり今也四至に頭一之を俳家奇人達と
ひふ後來名種密幸又瀧桶摸索れ羅我唱づんの嘆び
雀躍けより是も「如げ」等や子肯文化丙子芳歲
初春某度小筆を採

儂僻閑人青青



俳家奇人談序

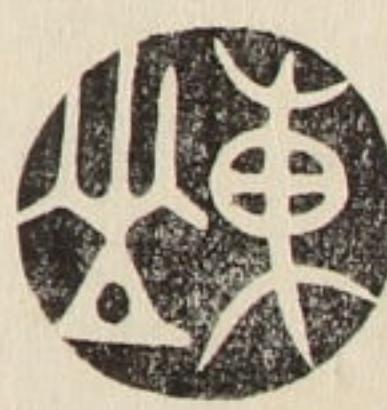
倭歌者詞雅而俳句者詞俗也比_ス之彼詩
與_ク諺諺者俗而叶_ハ音詩者雅而有韻固其
自然也余謂雅俗異其詞體裁遂別文質
已定而意趣亦互有優劣其感鬼神動人
情固同之若其詠_レ之人意有雅俗而其發_モ
言不同是故倭歌與詩固雅而詠有俗者
俳句與諺固俗而發有雅者則雅與俗不

可以詞害其意也竹內勾當玄玄一者所謂目雖盲不盲于心而居常好俳句其詠四時景象言人事喜戚閑遠之趣淡薄之味往往使人有無限可感者不為不多矣纂而輯之名曰詠物句選云玄玄一嘗曰古人之言俳句者不少而欲尚友其人則不可不知其意匠事蹟也於是乎迺撰有其美名佳句而事之可以賞者而遂成編

名之曰佛家奇人談其子再校而刻之以繼其父之志豈不懿哉苟世之言俳句者讀之辨今古之文質知意趣之雅俗則有復裨益于風教亦以為不少矣古人有言云誦其詩讀其書不知其人而可乎是以論其世是尚友也玄玄一其有感于此者也乎是為序

文化乙亥秋九月既望

江都 卧船散人譜



靈園

よのたけよのよのをよきよきよきよきよきよ
西よんのよののよのハよのよのよのよのよの
せよあよひよひよひよひよひよひよひよひ
やよあよあよおちよおちよおちよおちよお
うよあようようようようようようようよ
まほらよらよらよらよらよらよらよらよ
はまくのまう浮き墨を浮き墨を浮き墨を
浮き墨を浮き墨を浮き墨を浮き墨を浮

さうりておもひあらへるに心うそ子やよく
心を手つて物語る所あらすれは象耳を
はりて墨とすらぬま本の言あかづけ
きゆきちゆゑを今秋八月うるは宵宿豆又
あらおもひ生むて墨をおよげひぢてま
つめひきれさし墨をおよげひぢてま
墨の本のほきうどまく伊うりゆまうわく
墨をすまふよくまなづさく心平の
左辞 終ておもひうじりうち絶えの意をも

まつてふまうすやまくは伊うちあくよ
くすむれどある仰あ一曹のまう禪 ほ様を
えりて冊あはきうすああくをまういと是時
せおこりもむれくまくは見程うつて字
すくまうだもすてまう改ふてまうあくあく
まくまくやかくつまくまくはれあやまくま
抜きのいはほ一まくあたまうひくまくまく
やかまくまく一事たまく母のまくまくまくま
みやうすくまくまくまくまくまくまく

すすみ不^レト ま^レハけろ士^リ翁 やさしくち
あくま^レあくま^レあくと一 あきの^レまくまく
まゆもみゑみぢじ^レ 翁^レゆかぬひまくを
唐^レや^レま^レいとおむきの^レやつ^レ
やめおくみす^レまよナ^レまう^レ翁^レわすて
ほの^レをあかくまなよ^レまくまく

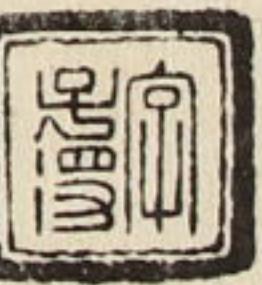
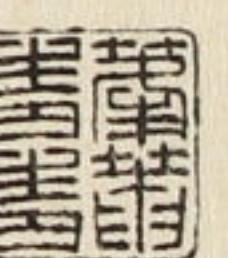
八
乃
余
固
宣
教
社

九例

一本文引用する所れ出の謂ゆる諸家集紀変難記志數
部々數百部一云本句といへども之を変何處時へ書め
ば可いふすアリ又傳此の正記も知人より得て此を詳記
一卷載在する若きよ文附ありトあく承に對て古今能
後八十餘家各自の書形風韻代焉らト一む
一世云唯筆手小傳ノ年代比次序より之す且その傳書
委曲方家承の家ノくは世紀よりつまゝ茲に墨氏素より
風流をすあめとぞれハすより
一文筆性純本山捨古千代也屬を承聞因づ絶する所と歟承
是あり迄まども空ますアリ残窓不見んと詮せば必ら空
主出と互考すトム

一曰才に慕て得る文古画優短尺出懐等並ばん故人
絶言の筆を借原も亦其れ旨意を解するの一助矣
然へや観る人これ諸我恩へ

蓬廬寄書識



佛家寄人談目次

上之卷

- 一宗祇法師
一山崎宗鑑
一杉田金一附 美濃女
一松江重頼附 春沈
一山本西武
一安原貞室附 元次
一齋友徳元

一高鳴玄札附

山夕

一荒木加友

一半井卜養附

慶友

一池田正式

一芳賀一晶

一中島貞宣附

二葉

一中島貞宣

一神壁忠知

一田氏捨子附

盤桂禪師

一池西言水

一西山宗因

一井原西雀

一椎本才磨附

圓水

一田中常矩附

常長

一田代松意附

正友

一菅谷高政

一伴菴信德

一上島鬼貫

一園女附

惟中

一小西來山附

由平

一松尾桃齋

一楓中某角

一服部嵐雪附

烈女

一向舟玄來

一僧文草

一森川許六

一惟然坊

一向舟玄來

一秋之坊附

李東

一僧浪化

一磨工北枝

一僧千那

一小川破笠

一路通

一梢風尾

一智月尾附

乙州

一鯉屋杉風

一暭坡

一誠智越人

一涼菴

一曾良

一原田字古

一知足一家

一生駒萬子

一山口素堂

一舍羅

一中川乙由

下之卷

一露川

一深川湖十

一高壁百里

附 琴風

一紀文親子

一秋色

一櫻井吏登

一大院二子風

一萬呂沾涼

附 行尚

一梅路

一立羽不角

一大吉子葉

一太吉子葉

一加茂原松

一素園貞佑

一松木淡漠

一堀内仙雀

一活井喬室

一清水超波

一
孟壁巴人

一橫并也有

一
千
代
女

一山口羅人

一建初涼佈

一遊女談

通計圖次八十有六譜

一 玄玄居士賦傳 附 今世名家跋句

佛家奇人後卷比上

竹窓玄玄一遠能男毫磨事事多參行

宗祇法師

宗祖法^{さうゆん}妙^{みょう}松^{まつ}年^{ねん}君^{きみ}比^ひ主^し玉^{たま}ト^トう^う猪^{いの}齒^し代^{だい}氣^き裁^{さい}小^こ猪^{いの}子^こ連歌^{れんが}
あら戎^{ごう}間^まま^まよ^よ惜^{しき}い^いう^う寄^よ宿^{すく}十^{じゅう}年^{ねん}闇^{くら}くら^う連^{れん}奇^ぎ村^{そん}年^{ねん}比^ひ
功^{こう}を^を積^つげれぞ^ぞ空^{そら}妙^{めう}み^み到^と王^{おう}雜^ざと答^{こな}ふ^ふ叟^ういはく^く独^{ひとり}らば^ば十^{じゅう}年^{ねん}
登^の鬼^き勤^{きん}勤^{きん}あ^あ如何^{いか}と^と兼^{いと}裁^{さい}大^{だい}ア^ア何^なた^た年^{ねん}我^わう^う及^及ぶ^ぶ而^而又^も可^か
す^すを^を感^{かん}せ^せー^ーと^とや^や漢^{かん}北^{ほく}相^あ如^ごく^くに^に十^{じゅう}才^{さい}て^て始^{はじ}く^く茅^{かや}經^{きやう}を^を禮^{れい}
唐^{とう}の^の高^{たか}遍^{へん}ハ^ハ六^{ろく}十^{じゅう}才^{さい}一^一て^て神^{かみ}て^て詩^し成^な作^{つく}能^のり^{れば}世^よ叟^うが^が連^{れん}奇^ぎ
達^{たつ}キ^きと^と亦^{また}宣^{あん}あ^あと^とば^ばや^や旅^ゆ小^こ停^{てい}母^のの^の鬼^き雲^{くも}も^も是^{これ}を^を称^ち
蜀^{しょく}時^{とき}雙^{ふた}方^{かた}り^り已^ま詔^しせ^せ王^{おう}或^も時^{とき}迎^{むか}隣^隣よ^よ難^{なん}產^{さん}何^か王^{おう}り^る役^えち^ちも^も
屋^やよ^よ觀^{せん}一^は摩^ま何^か般^{べん}若^わは^はら^らみ^み女^のあ^あ物^{もの}う^う家^く宗^{しゆ}祖^そ一^一ニ^七滿^{まん}海^{かい}で^で

さんのはくと宗長は繼一けるが乍ち鬻子をお生せり又時君帝の瘧疾發ひせむつるに歴史の蓮奇一て正金悟互ひ一子たり多妙境よへど記ひをあ時をほと少ふじま金號を種玉彦匈御神とくふ何年の年ふう有けむ仲秋三五比徳一云深亥か、里園の宴公あらばる哉歌く「みそくせの月を雲うほ今歌うかげ句右今堂法すく人の誦する所より又連脇一て、妻は娘るハ文小附の宿うを高笠ニ條院瀧波の古奇小修一吟あり後は薦翁宴に感懶一て、妻は中ハ文小室社の高うをそぞる慕れよりあよ松風を吹若浦ハ被法吹哉宗家こうくま一生北堂ゐま涼居一て、煙信ふ文龜二年七月お浴湯牛北宿舎に寂す巖八十宿ニ吾を辞す家の奇「ほうあ一や鶴乃林の樂」も立をくわぬる身ある暇むき

荒本國守武

荒本國守武ハ伊勢國宮の神官京あり和歌連奇哉好ぐ一時小名あ至或曰蓮奇興行君席又限一ふ皆法辨の人くまれば「五度義を及き」を何れをかみあは宗神傍ノ一車ノ一毛を要比城主焉帽子着て口附らばハ殊々興行までぞアラえりる嘗く童子教誠比治又一夜百首を詠ず一毛おどに在中君ニ字哉押は是哉世中百首とりよ又國人学重一て伊勢瀧智ニモ称せり且他清比鼻祖あ至一毛日や祚代の事も思あり、擅子や蓑跡君系の三落一種うちお調高尚人の及げる而後矣獨吟多句をすほを嘗頃又「能梅や輕ぐ」を祚也多る今之松篇哉唐子不揚乃什多一眞味之後東金一圍め等君名家を出すも時人哉以く勢陽れ株梁とくまの堂むだ一

守武靈像者摹_{メカシ}往時所崇於度會外宮之真而其門

葉之所傳也先乾什

素出其泓嘗師舍

難點止附與沾測

沾測授之雪齋

後莫知其所在后乾什

索求而得之云爲其古物可知也今取

以圖焉

蓬廬青青



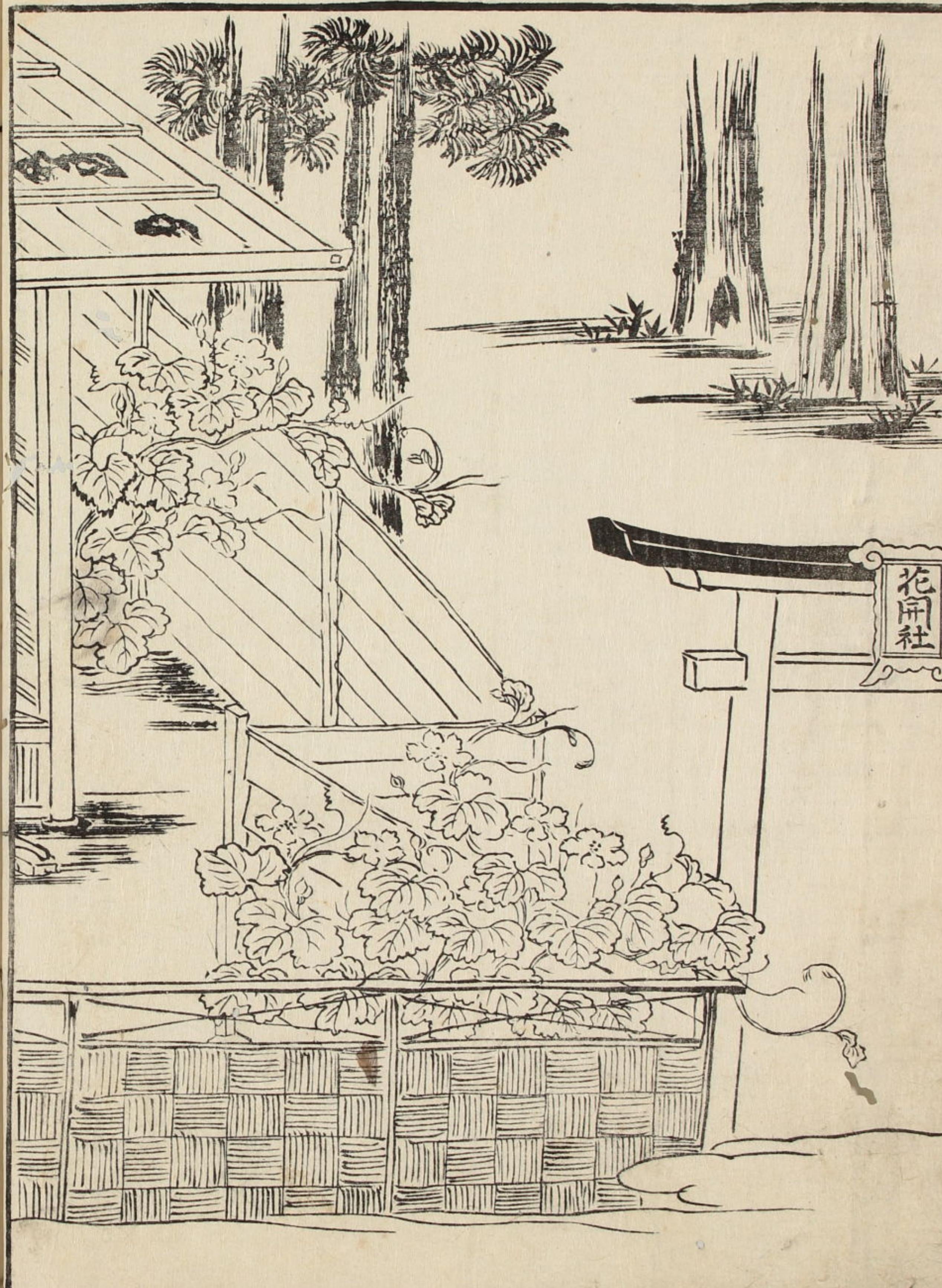
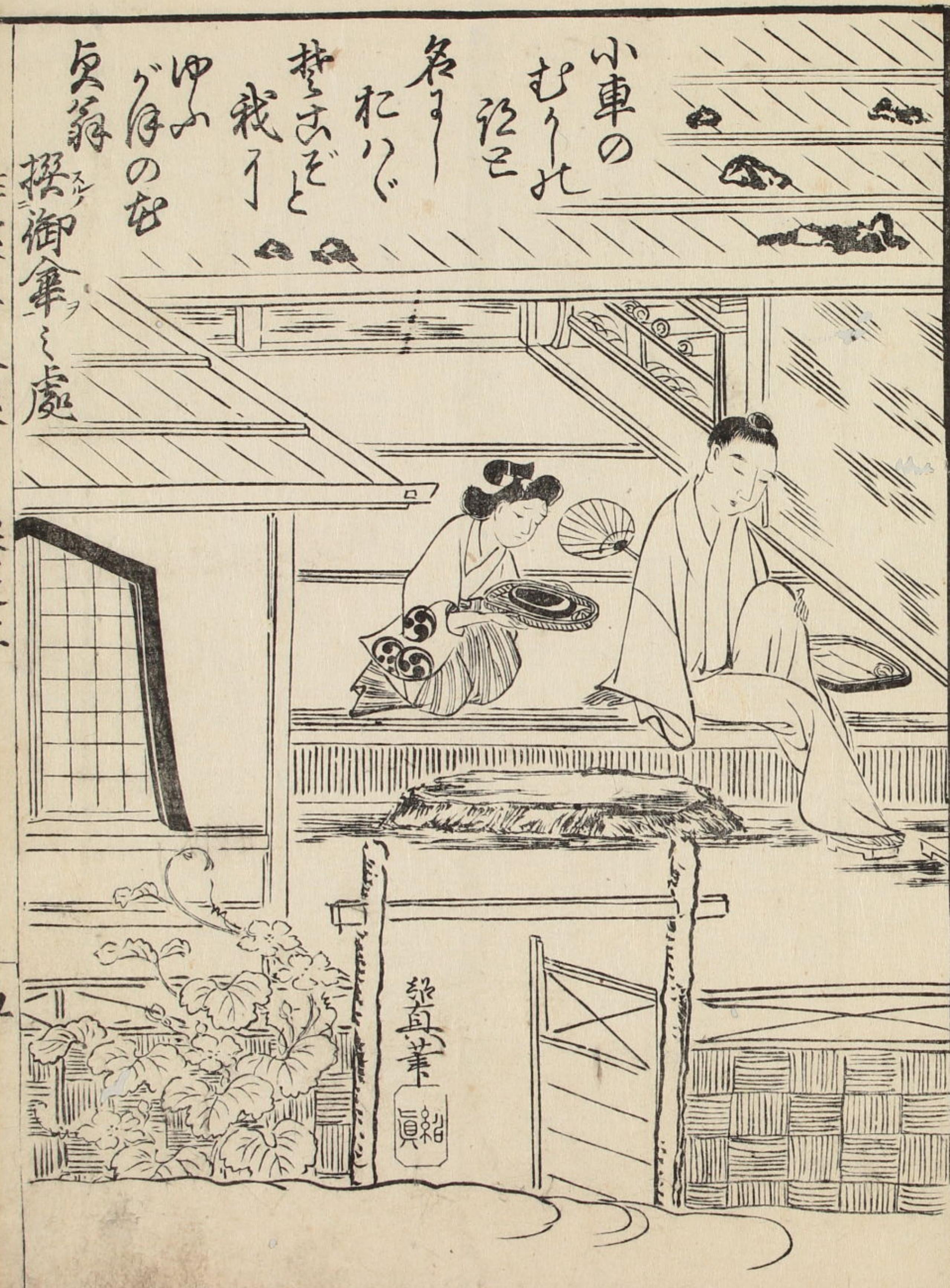
也小「葛巻城主豈乃彌陀仙とゆふ」哉_{アホ}是無源古稀而持_{モテテ}也
いふあひて北向城辯_{セイ}也あうと宿_スもハ紀あるす晋子改_ス
みの匂_ミりて北向城辯_{セイ}也歌_シ越_タと毛又り_マる
矣_ゼり天文十八年八月辛巳辯_{セイ}也歌_シ越_タと毛又り_マる
神_ミ山_ミ峯_ミ北_ミ風_ミ峯_ミの松風_ミ發_タく招教_タ小今日も_タんやうん
我_ウ也_カ奈_カ

山海宗經

山海宗經は近江_お君人中姓支那氏_{アリ}代_ト足利家の
臣_トなり長享_チ之年佐_ニ本_ト行_フ上_ト洛_カ也_シる軍_シ義尚_ミづ
くら兵_トを帥_ク追_ハ付_ク一_ト精_ト利_トを得_ス也同_ク二年_ト功_トも_アりて
肉_ト古_ト小任_セざ_レれ義熙_ト改_ム延_ヒ祐_ト之年義熙_ト松_ト峯_トあ_トず
一_ト遂_ハ不_ト豐_ト也_シ時_ト小支那氏_ト十五_ト峯_ト主_ト邊_トの別_ト戎_ト怨_トみ_アり
段_ト仕_ト一_ト利_ト效_ク一_ト接_ハ妙_ト兀_ト高_ト也_シ一_ト後_ト據_ハ別_ト山_ト海_ト竹_ト林_ト也_シ

造家素より和歌連音小達一又懶惰もよがり或時逍遙院
殿塞陸はい 家長謹からんとも余体よたいとて多不覺たぶける烟巻きみをわ
て歎空かうくうの後ごを「手小ねても婆ばをアミバ錦鬼ききつぢと
と異きど毛ひる伐ばすんとすればご寔まつの沢水家去か蛇へア返生
言い何な代しくするよん煙えんづか三あす窓まど案あんするに難候集むずか懈ゆる解わか年因耕筆
張はう紙しを遷ときとおほ進すす本城谷君もと山公さんを龍山公りゆうざんと家
予宿町掌つかさす滑鬚なめひを平地ひらちを準棲そんニせられば滑鬚なめひ匂におまれを性たごの持も
志こころむる変かり或も「尾毛おもを傳つたふ事こと」と而おもて附つ匂にお金かなけ
「水鷺みずひの尾羽おもひれぬけさ解わかく又「切きくきくをあり切きくきくもあふ」
とりくるに三匂さんにお「盜ぬす経き」てアミバ糞子こゑをう
斐ひ匂におと古雅こやあり「年伐としついて歌うたす」よる憊くわいくく憐れ小本こよ
志こころら麻まあ尋たず北花ほうり「傘ささをさば雨あめ」もおよ夜半よ月つき
居ゐく「有あゞと祀まつ婆ばわらまんか祀まつつぞと

松永久祐



里くにづく。一句を彌ナヌ爰はめて國一らく祚延ひく我後と
起す。一ノ家小於く小祠を繕拂一ノ花闇禍乃と奉神す
賀祠也。奇一莫代を三月の私店春秋を送り祀害なれ云ば禁也
1335秋年の秋 天頂より御福宗の本弘称を許せられ神く玄
燐宮云哉あははして13年二名く天子也。年はとせ一命より
内換の附添母屋小入との舉く旨小傳教す附天子也定一
附天子也。6年あり今立ハ西武よて私重國如日能
通食令徳執筆と七人す。附天子發匂局と正潔す。腰母す
いづれ始の時一解らせく裳ひよ。天子西一雲月花一枝す。見
うきふ。一等人の臺席也種や私店同。一等坐す。腰までも。次
略。失明の後。私店二人あり。殊重識足。私もとなく年長。ドて
殊重。信と國至。私也。執筆。私もと。又

可第の後。何年。年。や。有けん。在りて。堯。御。私。也
大佛殿比肩。才。许。多。を。褐。玉。く。み。則。ク。ノ。栗。樹。茂。拂。私
榜。を。か。一。材。玉。と。名。く。中。小。報。恩。義。何。り。納。る。に。妙。經
千部。子。尋。残。以。す。翁。か。一。六。奇。仙。工。官。左。子。達。唐。大。ゆ。人。ね。其。も。比
像。を。画。く。あ。よ。吟。意。觸。あ。里。詩。奇。蓮。僧。志。短。石。を。集。む。直
小。岩。比。丸。屋。蓋。底。を。ほ。く。圓。に。通。だ。方。域。東。西。武。十。万。南。北。三。十
百。萬。緋。絲。す。る。小。皆。竹。を。証。て。ほ。今。圖。あ。日。字。、。主。拂。根。を。存
せ。わ。主。權。貴。小。幸。せ。ら。も。ほ。と。此。家。の。頑。強。ア。リ。承。應。二
年。小。政。ほ。高。八。十三。碑。也。三。空。門。日。ハ。形。こ。時。る。お。り。ハ。一。る。
今。夕。お。う。く。モ。聖。極。也。の。あ。い。う。系。更。翁。は。ド。め。大。志。り。で
仰。仰。代。變。起。す。羅。山。草。山。の。森。子。を。所。く。つ。人。と。す。ほ。因。古。爾
室。社。更。宣。而。武。移。國。主。徳。季。吟。徳。え。未。得。去。れ。一。秀。安。靜。家。

時後後松雲定室答みあ家風あり鳴呼盛ち處ウホ

松園至一 附 美津め

松園勾當金一も勢陽神跡山比林麻子居せり全性十二律の
御子成穂く柏の巻をかへ御成得つりそりの我 朝の御
膳とも稱つて一懷抱又守武が他風を慕ひ遠我從する
在はぬか一老後望すに貞徳の漏削をと交へこそを勾當
孫よ笑えらる「喰管の見立不ど色香うか」昔れこむく宣
取毛づ奈松角「ねづぐうす管篠や圓の御思ひばりき世時
小一て是妙可人そへ寛く水七年六月八十三歳にて死
つ人差津めと同玉山因松本差立が妻よりて能勝志妙かす
歎かげて知ひ何よ松字「右毛づり志也ぬ廢代手先かと松
つより松坂の至めを出きり

野口玄園

附 濱水

跡に玄園初名かに重保姓雖尼市三房三松常居鳥丸家元廣の
玄館よ近く平生お入て賀和奇志にまよづきられ里帰と
学び松主より玄法を傳ハ里翁體探幽より画別裁たりとい
ういふが長する而古づ字足の才子あり一八世松陰をあ佩せ
る毫氣竹水や汗毛傳モ文稿「山姫と繪小の名」や玄園姫
「履小り」さぞかし落葉と東山此人嘆草を題詞の山頭子地名の
を書一も毛一也前引去洋絵は櫻一て後世の転写と云ふ(原義海もふ
く是成称せらる珍する時年七十一寛文九年九月あり詩
世一月意の三句同を今あるせうか

喜本跡水を玄園門一も玄梅と号に「玄まる年の歩
みや魚千里一室暖の雅機を寫ひと窓比樹「今日比序窮も西

波川稿紫いふた翁「おづくら望海雲や千葉通みづ言を繰ぐ
孤鶴形式を慕ひて享体十八年小死す

松江重程 附 美濃

松江重程俗名古文字庭治直ち他名雅和とひく句集小説を傳
習に至風流すと立園と称伸すび一彼嘗て意熱す折する
事もあが「歌祀の様」ばくをゆく復讐うか「秋やけさ」足よ知歌
城い様「料理河童囃小説あー括也まー歌子生侍凌窓
同つて交を絶あと枚多あめり寛之承のほりよ本子集を撰す
は時立甫「憂少を河芦せまう比秀」あといへる句找加入せん
哉程む程の句「墨少立郎中のと同縁すればと文がほに雨門す」
「小説ふ沙色」の縁よりはけ身より「進られけきごも遠す」
「序あせだき小説くびすれ羽衣み始く絶うり物語く妙を詠
作

他日雨戒害せんと計る因縁古物を喫く禮才なく雨季も勤
高せり又毛吹け絶作ゆる皆弘山の正式とも矛柄又たすぶす
あり正式證又立室亡母の追悔又「禁き益世著」(覺れ佛の意)と
りふ向哉不せりもみれあまを識ゆるすり不快この國より程
室立の宿を「招教」と曰だけ被ふてやはまき一げとへにば
りみりる宿を喫く「送立は身此處のお文字とへやひく
此句前表立國一トや跡子者とあく身浦よりぬ延宝八年七
十四景あり

妻本喜辺の初め重程の門下にて後立退化才子と名高或ひ
程のつ徳立を常室才室好室乞り是被に重とゆき長
辯の列よへんる代程に程ゆるけず辯ふれをわゆね了破
つて更姓よ屬すりと「本良法ゆる葉つむ」やと小袖「腰ゆ

巨璣よて年比ひのあと正徳又年よ死に

言湘楠屋

言湘楠屋は京洛小居にて院心子と号す「东より垂れにあらる
紀初日をあ「多筆や落色喰ふも悠哉」「世人の如叶ふあるを
體うる「落笔もゆきあれやゆくもげ又音信ふ遠する比安元
行やく筆走り、否も餘色改らず絶たぬと國辞」と故人の季
吟を追あり吟瘦の客都へおうるは是あは老が先客をゆり
え縁十二年四月八十九筆行く三十尺

山本西武

山本氏を神免系承よ恒にて締をあふ後子へ往いて西武
とのせが承すと風か新とも写に「大戸おぐー小在うふ一ざ
クあ「墨ばくらまらぶや文殊ぬけんぞ」「かづくふ身の感
累て何させみ「辛も不残生ば三五日夜を「金持の懷さう
亥高子うるお此へ筆筆より沙翁の執筆をりあよ祕法盡く
習ひ得」うりゆも毎筆三物を継ぐ他小洋さび惟我と西武
西武とおみまえ我ほの人にちに時うり筆病癡よ於く
此手小娘の式を譲る由みいはく

脩簡批魚の後無金ゆ「別ち洋名やは批魚は次人内家像
一幅墨やは今迄小掛可望の遺物小殘金やは能る

喜興翁

元武庵

長頸丸利

まつ人多忙中又移宿切み戒戒せらるるにほの冥加小叶ひ
ゆすりこはんや候主とぞめだててすり舊筆りを編りて
初心戒尊む垣樞とりふ出を差すて懶の廢経立つ何の年ノや

寒風吹水

萬物皆休

一枝獨秀

孤松傲雪

一念

萬物皆休

孤松傲雪

孤松傲雪

有け事七十ニ來テ
死せり辞也「君の御
氣あきもしくや諱じ也」

鵝冠舟令注

鶴冠丹良純ケイドウの京沙若人カサノヒトに講究ダムと号ハシメテ後アフタよ當今タガタキ天子チヤウジ
人主ヒンシる十二代トシダエ比達ヒタツ律リツを辟ハサハサくと號ハシメテと改ハシメテむ「極比江カタヒエ」の波比號ヒタツや松
轡子ハヤシ一稍イハツ毒ヤモリのねノをしきげスルてや夜ヨ這星ツツキ一社擇ハセ立縫ハシメり枯禁ハシメの
香ハラハラうづくムる合羽ハマハマ打拂ハラハラふ袖スリーブもすム或時オトコ停步ハラハラ立守ハラハラ
御ミツは体アノく獨吟ハラハラ手向ハラハラ枝ハラハラ落ハラハラに仰ハラハラ氣ハラハラを深ハラハラく生ハラハラれムを感ハラハラざムる
延寶七年九十一比寄ヒタツを修ハラハラ羅ハラハラ那ハラハラ波ハラハラ集ハラハラ不ハラハラ良祝ハラハラと有ハラハラ
て「歎ハラハラ乎ハラハラ也ハラハラ哉ハラハラすも山ハラハラ也ハラハラ也ハラハラ可ハラハラ内ハラハラて「多ハラハラそぞい
比ハラハラ三ハラハラ禁ハラハラやふ名ハラハラ余ハラハラ今ハラハラの去ハラハラと良祝ハラハラが後ハラハラ了ハラハラ記ハラハラすハ恐ハラハラくも
生ハラハラ一つハラハラすの庄ハラハラ」

あゑの室 附 元済

譽

貞相



葉を隠すと嘆息する小懃あり「うごづみあはうたの雨」尼山松
涼一門の奥よりぢれや衣車移り又昇すど一高山稟堺
而お高掛抱小「借錢の淵」はまぬぬうか匂室少年ふひて
ほドたすすり何あるわらみく有けんいこ興りと其角の
記よ載り「寛文十一年二月六日」を引せり是處
て「松陰や月」三五夜中納云と粗支匂室うむ一枕暮
鹿鳴山の月さんと思ひ立つて萬葉の記引よ生うり
室子あはえ次とのふ幼に「三英遺志才」何り「七夕や後玉
あはく玉北橋と此句十三葉の時作を主と玉滿集了」
乃えたま

北村季吟 附 游喜

王後ノ平あ玉津學の席祝と玉海懶譜を学ぶの神め匂室
成ゆら「中年あはく海雲齋」を文く拾穗翁と号せしも室を
離す時の名を全といふ素性略記アテ 国学は長きり後
進との交戸主とする者古來此要を納る源氏ものうり
ノ游月抄を著し「松楚」アテ 玉海抄を連に至
て和物が玉海翁を佑等小部る所で注解する所の去五十
家の「玉」離す連アテ翠東へ歸れ音掌跡と補せしれ食縁を
石残縁の「翠」名譽比草あとはや懶風いまと古縁を
経さばい「一」じよ又一種の種類なり「一」儀とぞくく何りく
意アラム「後筋残すにてや翁の玉縁」め翁を渝ひあハ志
肉は哉「あらくと在すがね」魂縁「翁士は山沙をともま記

案此の家臣作を續て壇山比井茂撰は繼室み家昌ア
依る宝永二年八十八歳年暮を終ふ
息湖表ニ色小奇掌而小古陳花果院と号シ後生畏ムト
此子の風格高き跡筆小風流「蝶軒」——以テ其名揚シ内哉
名の附奴和加左ゆ一山櫻一月比氣比附奴松門主楊鑑翁天地
比ぬとぞゆる時致うかえ縁十年父又先づつて死に五十有
餘年をむぐ一

秋扇傳元

秋扇氏ハ源氏波草也人より國伝秀少弐秀石因ア
嵩一級するに取く己も亦長良河を渡リ通承利勢一て
傳元と改名一帆字号に神奈和音城梅蘭一て江戸怪樂
歌小住せり一年よ京一ミタツマハ入る即ち百歌興り何「京

国倉あこばの墨若家めぐり名経育うらおと訛れうじす傳元
牒の赤達我ゆ西よ鶴ふらん未だ下又獨吟千句を御く名
人よ知ら除考承中室社物子集を撰するの間秀逸ぢりを
書院小メ一匁「妻」内や小ほん因出うだつての松邊一一世の作
者と稱さる「大和」とも「原」ともいひ「羽音北面」何と仄くを
書不ど云想物なり「善す而初ん抄何りに於て傳出を梓
する」是成始と云君別ふ於く歎す辯世「今までん生氣ハるを
因夜うか是太空縫の文ふ標わき同く幻化如夢如影如冰月」と妙
嘉経うか

石田未得 脚未附

石田又ちハ江戸サヘ幕府町小住キリ何ある處アヤガムクお
あは居る家種もしく再び江戸一來里数を下へと名を利江

と改め種を云れと更りと京にて室町を種と初み遅より
ふゆ乾雲と号す「紫雲やうふ香そむるちのま」記一
て腐らきぬ伽よすみ空あ當時句作の序に云れとより云
掛け門宮に極ふかく里立廟たていもを附をひく
宗を立廟たていくらはれ桂芳よ庭舎と藝向へ區區ほぢく
齋さいに考缺しき古とす
寛かん天正九年七月八十有餘よして歿お
男赤原父の墓を徳とく民雲と号す「河あ比附おほあみの事ことや屋形
永清と号すと能よくつと多おうよとくの云和二年三月
此去こよ我わ去よ

高鳴玄札

言ふ所云れも夢あ山田の產和前戎物をもんとよどみび佛像をば
乞ふははつる共に去れ本年江戸へまく醫術をもつて傍ら
佛像をおしゃせり性をこむ祠ヨリてせすゆふ跡一左より紀
友とち法云一して考る業より佛像比と拂至まど申一
けるとぞ四十二のまよ多る「守り西く今年ハ底く一十二
神或人探幽り氣士考之繪比繫我乞るに「名をえ一や古
あづからぬ土をあうつ一又「喰處のり自どめで爰ねる處
「舊の往來がれ臭かさんあれ當時少く云掛の妙手と名
立一を宣あはれか一年瘡を癪とするに匂ら癪すれども
功成奏せば數日引退居氣ア一り少く好るにすれども
を消す在るにとくに獨吟比百韻ありるふを組句「卯の巻
巻るの風のねに重うふ「いざ馬籠よせん松字と此附句被禱
ヲや威^きモテりり其體^きいつ^クノ所^所ふけり或^シ記連中^{じゆ}の詔
一書^{しょ}お東里^{とう}點^{てん}さんす^す被^ひ被^ひま^ま走^は車^{くるま}て是^はに廿日^{じゅう}ノ

又圖書成坐なま一已れ名なまのすり重じあごと寢ひらり
寝あた立あだ一う推おき引ひき一や文ふみ又不ふえに面めん側そくあぐく今こて爰あは立あた
あぐこりいうしもあく再さくが立たて一而よりぬ翌日連中とあは
打うち揃そろひ衣きぬを替かわ系けい一柳やなぎはドメ北卷きた本もと幕まく又改かわぎれれの
時とき衣きぬ引ひき合あき一而より後ちの卷まきこひ略ほそ多く善よ何なにの才才能
か極ごく一やと豈かふれ模も子こ成な折ち柳やなぎの日ひくよ達たつする物もの
我われも終おひ比ひ百ひゃく少すこすすこ多おほ後ご卷まき用もち一作さく者しやくとと隨つづ分ぶん
生う情せあれえ答こた一休きゆうを歸かへと即そく誓ちかうあり

門人山夕江戸とう又傳つた一柳やなぎ業わざ茂しげを川延室せんやあり享保北閑けいほうに
代だい一而より強たけうり一急きゅう一画經綱目つけいのうめい上じょう種山じゅうさん一あつほや誰だが
クくあく雲くもの初はじ代だい山夕やまゆき一栗くり一や高世蟹たかよせ蟹かに北閑衣けいひ三代さんだい山夕やまゆき
「不ふきいざ報ほ事ことつひく婦めの梅うめ三さん代だい山夕やまゆき

池田正式

池田正式いけだ まさしきと相別號さがらう山の巖士いわむすより御酒ごしゅの至いたて御酒ごしゅ雅まさ
情じやうあり是ぜよ嘆たんえうる匂にお一獨ひとり毛け影かげよよ無む比ひ衣きぬ一毛け身み輕う細ほそ
勤こまけゑゑの爲ためせふ花はなを下くだるるああととはは腰こし一そばそば
居ゐく又またぬや景けい跡あとのたああせせとと遠とお一一ちの吹ふきよ達たつ一後ご
暮くろアアてほほああききと腰こし一いのちの直ただみ吉よしよゆに遺い意いに急いそ回まわり
一一て手ておおろろ枝えを柳やなぎ下くだるる向むか一極きく小こ一體たい百ひゃく十じゅう家いえ一一て
ああひひてて一一の歌うた成な下くだるる向むか一極きく小こ一體たい百ひゃく十じゅう家いえ一一て
間まづづはは當あ小こははる度ど一一の歌うた一風ふう氣きの聲こゑ全ぜんああととははや威い威い
重お大お也や吹ふき年と成な下くだるる歌うた一一度ど一風ふう氣きの聲こゑ全ぜんああととははや威い威い
いいるを毫ひ毛けよおおすす一一歌うた一一たまたま一一も何なに一一變かわ一一く
浪なみ屋やの裏うら歌うたといつる者ものの匂においい香かうう式しきおおやを懷い里さと室むろ有あ

りぬ虫残事にて多作の物をより残無（シタム）ドより形傳へばて大
いゝ想り直み累（ハシマリ）ト柿を附（フチ）たり式見（カタミ）よ詮（カタマリ）むが公をすゞめ
強（ヨウ）く庵みる時人（ヒン）の柔弱（ヨウナク）を見るを識（シテ）者（サマ）多う空（ホコロ）ト中みを
重ねて見る身比根（シノブ）まふるける残種（シヤウジン）を麻（シ）も育（アシテ）トとど又粗（ハラハラ）
を出（スル）れあらう匂（シナガ）らの奇食（キシキ）却面（ツケメイ）多う作り作名（サクメイ）一て卒歌實（ソクガシ）村布麻（ブマ）
國造（クニナシ）二人とせ至今に於よ詮（カタマリ）する狂奇（キヤウキ）考家（カヤウカ）復古（フクコト）の狂名（キヤウメイ）を乞
苦（ク）まや様（ヨウ）とああん

萬木加友

荒木春廣
いとやか
御行を以て
江戸本郷町
ひすみを至る
一年よほて
くつより御名
城加藤とひふ
寛文中ちんすりを句おほく
乃て今人引く
あまくもはよ
城下えいぢ山の巻
アホあそれ
年高をあらび
ゆうじゆ
同時安政
同名の仰
まうり
吉野郡
かねとくふき
内閣書院
一がや子すら

宋林下集 附藝文

事井ト寢子々々寛文の役者は至り
法眼ヨリ昇きせり
御家へ通じて狂言を能ひ神め宦游を繕フ
殊泡瀬の地面
持領有村ト寢へ在りとアモ思ひリふうみち我志すれ御料あ
リム又仰傳をされんとて東翁よ風あよ「改革のほ茎あ無の
天下か「喜之門已室やゆみげれうづくら

首贊一鼎

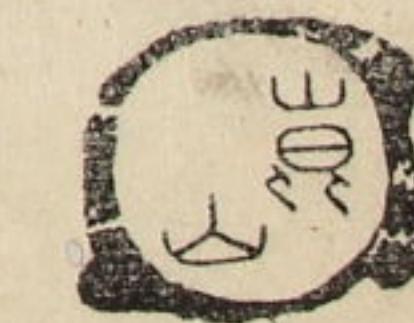
守林氏多喜温體ト、嘗て水泉妙瑞也。人皆云善き人の子あり
をひきいを嗜く。名を茶友といふ。『茶翁集』や本丸た粒の事。山椒
守哲一鼎

まことか

もも

しき

一葉



（つる）

勝ちの内一客の高懐年乞徳が嵐山の市被傳りくに
戸へ來り冥靈堂と号す。宝永四年正月六十有餘年小
て歿せり。

中鷗友宜 附二葉

中鷗友宜の囃子と号は又名乐翁。初め
季吟小畠あんで後より翁に倚る。江戸派中江戸派浪橋がよ
往きり。同北本や松津すどちのと重ね年一改。享和祐つゝ
包むやあるのな。或時吟叟を許へ。きけ。夏代季吟は承より
様の趣うて。翁至り。アラモの流れ庭。あの松と吟叟を贈
せうきり。予も何を。享和の法を。島根の様子と。あらのまよ。二
禁すと。能作を好む。一年元日より。死ぬと。生る筈あり。かくの
はるよのふ文字。来因より。筆ぐとき字。方角を彰。匂空不云

威^{てぐい}る川^{みよし}を^{アリ}と^{シテ}保^{ホル}長^{ナガ}安^{ヤス}一^{ヒサシ}

祚體遺知

西山宗法

西山次郎重一も主家肥後別加敷奈ち臣うち全をおもひに相あら神め
連音を唱詠はんあんて宗源守武の風流被あくふす性寄女
河内より下よ進むるすり名ふ哉うり寧波中主家性軽きすりあ
里く玉を去り翁不遜返みん我よせを風波感破一て一派此
始祖とあゆみ難極して宗因と改名一祖の御跡よ歴接一極て
雅波の子滿よト居はせうす翁と称せり歎伐忘吾と号一高
を尚榮といふ此翁重松と更り称する鬼叟きしゆが筆記よ見くら
小楠翁重松を以とおといえむれ祖すに重松と翁とふ快の後里村あるひて
連音をほふ楠翁つを回して時くね舍一往來するより何やまう来ゆる
とアラミテ鬼叟は向る重松を延室の比江戸よて松翁きりぐが紫雲懶情ざいじん該林
哉嘗初よりお爲此便の下向而至一を途に江戸十る数を興り
して乃翁弘む生嘗改小楠翁一姓の寔小侯林比本河より楠のを
時々一奥へ別岩本の岸主風虎齋治比ニ公卿こうけい入玉ひてよその吹
あま一有その源流はすく弘すと一ことや或日市村竹さ芝
居入翁に仰そりわが翁益翁辰合らゆく初て此翁よ萬劫せざる
阿一もつ人何某うる事よ一子もほぢり竹たけのじゆ

雪國の櫻大

内多^{かく}かまくらの外ものゝ
せりとハ切々垣根外れ花
風すすき草麦一穂を我者よ
雲あき、もてハ廻文乃状
夜あはれ打付竹筆^{けい}
録すとけつる^タの秋
ときより絶てきある時^ま
愁病を^{カニ}歩行^{コウ}て身ちあう
歌^{カク}あり川後^{アシ}一廻^{コウ}北緯

さうなふ宿^一と^二浦めり鷦
鷯^{セキ}を復^{もど}すと^三月を書^る
鳥^{リヤウ}か^四そく^五聲^六節
うつ^七と^八千^九双袖風^十
たうせん^{十一}わやま^{十二}と^{十三}花^{十四}
有^ハめ^トま^ト歌^トと^ト宿^トを^ト
ゆう^トと^トへ^トあ^トと^ト歌^トと^ト
花^トの^ト墙^ト耳^トと^トあ^トと^ト歌^ト
先^トイロハ布用^トお^トと^ト歌^ト

流^フ弦^スのら^ムと^ム夕風^トよ^ヒ
因^メ株^をい^シまくらん^シ年^シ代^シ松
うん候^ルて^テ洋^ヨ板^ボば^ハ弘^ヒ
は世^セ新^ハ之^ミ被^ハかく^ハ祐^{アツ}ア^ハ翁^ウ
太^タ行^ハイ^ハ松^シ海^シ石^シ鷗^シ
礼^{ラシ}櫛^シや柵^シ立^{マサニ}セ^マから^ハ
葛^ハ札^シを^ハナ^ハハ^ハお^ハき^ハう
迷^{ハシ}院^ハ因^メ入^{ハシ}能^{ハシ}わ^ハ歌^{ハシ}
波^{ハシ}瀬^{ハシ}お^{ハシ}ま^{ハシ}を^{ハシ}の^{ハシ}き^{ハシ}

本^トノ^ト一^ト聲^トあ^トと^ト答^ト
僻^ヒ塞^シ玄^シ十九^ト勺^ト
長^ト六^ト藝^ト

時ちのやくをうへ外もの
せりとひ切あ植根卯比花
匂うよ萬夷^{大車の声ともあらう}稻を我者よ
雲ももしてハ廻又乃狀
羽林火打付行葦^{信重今いづれ}背
鶴すそけつるク葉の秋
かどき八^レ狩て色あ母^{シテ}蒙
遠^カ海を^カ新^カて^カ傍^カちのち
歌^カ川波^カ廻^カれ^カ緒^カ
さうなり^カ浦^カ浦^カう

うん^ハ流^ハして^ハ津^ハに^ハ弘^ハ
ほ世^ハ入^ハ雜^ハが^ハ祐^ハア^ハく^ハ前^ハ
大河^ハイ^ハの^ハ源^ハ傳^ハよ^ハ石^ハ移^ハ
礼^ハ懲^ハや^ハ柵^ハみ^ハ木^ハセ^ハモ^ハが^ハう^ハ
幕^ハ火^ハ燒^ハて^ハ風^ハ呑^ハ乃^ハ捕^ハ
割^ハれ^ハを^ハ十^ハ八^ハ不^ハ打^ハき^ハう^ハ
迷^ハ隨^ハ八^ハ國^ハ入^ハ總^ハお^ハ取^ハか^ハ
は^ハ暖^ハ火^ハ交^ハを^ハ經^ハき^ハ御^ハ院^ハ
さ^ハう^ハ眼^ハナ^ハ向^ハた^ハと^ハ有^ハ
管^ハ下^ハ九^ハ多^ハう^ハる^ハ方^ハ冲^ハ

素^キれ^ハを^ハ復^カを^ハ更^カフ^ハと^ハ交^カ事^ハ
是^キ事^ハの^ハそ^ハう^ハゆ^ハ聲^ハ角^ハ
ア^ハの^ハも^ハ代^カ二^ハ双^ハ袖^ハ肩^ハ
だ^ハセ^ハア^ハ之^ハか^ハ也^ハ空^ハ荒^ハ
有^ハ氣^ハ空^ハ那^ハき^ハ高^ハの^ハ毛^ハ
ゆ^ハ立^ハア^ハと^ハ毛^ハ比^ハ較^ハ
泥^ハの^ハ口^ハも^ハと^ハケ^ハ山^ハ
先^ハイロ^ハ布^ハ用^ハの^ハ廣^ハト^ハ那^ハ
泥^ハ強^ハの^ハち^ハと^ハタ^ハ風^ハあ^ハい^ハ

膾^ハ立^ハす^ハつ^ハよ^ハ博^ハけ^ハり^ハ坂^ハ
小^ハ松^ハ原^ハ恨^ハ引^ハ之^ハ庵^ハ起^ハ
世^ハ無^ハ銀^ハ脚^ハア^ハ色^ハ青^ハ天^ハ
狹^ハ法^ハ子^ハ久^ハ毛^ハ代^ハ寫^ハら^ハう^ハて^ハ
あ^ハ下^ハト^ハ翠^ハあ^ハ谷^ハ翠^ハ
付^ハ金^ハサ^ハ武^ハ向^ハ
も^ハや^ハち^ハま^ハ原^ハ身^ハ
ヤ^ハく^ハ處^ハ自^ハ身^ハ
莫^ハ來^ハ威^ハ手^ハ承^ハ新^ハ海^ハ露^ハ

用^ハ物^ハい^ハた^ハあ^ハと^ハも^ハと^ハ身^ハ共^ハ

字茂並^{モキ}ウ板橋^{バン}翁^ウ小竊^{コトノハ}ひりるにおやくと冠^{クヨム}すじーと教^{モシ}ける後^{モロ}了^{モリ}蕉^{モモ}翁^ウ吟^{モモ}のを^{モモ}子^{モモ}よ^{モモ}示^{モモ}て^{モモ}を^{モモ}あ^{モモ}才^{モモ}茂^{モモ}并^{モモ}翁^ウあり^{モモ}金^{モモ}一^{モモ}あり^{モモ}凡^{モモ}モ^{モモ}一代^{モモ}比^{モモ}名^{モモ}句^{モモ}と^{モモ}りふ^{モモ}「^{モモ}金^{モモ}翁^ウや^{モモ}豈^{モモ}う^{モモ}あ^{モモ}なる^{モモ}金^{モモ}所^{モモ}許^{モモ}ひ^{モモ}此^{モモ}什^{モモ}古^{モモ}今^{モモ}ふ^{モモ}ま^{モモ}一^{モモ}之^{モモ}津^{モモ}せ^{モモ}り又^{モモ}「^{モモ}新^{モモ}妻^{モモ}の^{モモ}は^{モモ}蒙^{モモ}へ^{モモ}右^{モモ}き^{モモ}云^{モモ}う^{モモ}あ^{モモ}「^{モモ}此^{モモ}中^{モモ}や^{モモ}擣^{モモ}くと^{モモ}廢^{モモ}き^{モモ}移^{モモ}も^{モモ}何^{モモ}れ^{モモ}「^{モモ}極^{モモ}め^{モモ}も^{モモ}や^{モモ}い^{モモ}う^{モモ}此^{モモ}王^{モモ}紙^{モモ}械^{モモ}「^{モモ}宥^{モモ}の津^{モモ}を^{モモ}残^{モモ}る^{モモ}松^{モモ}鷗^{モモ}此^{モモ}句^{モモ}き^{モモ}とう^{モモ}卓^{モモ}絃^{モモ}と^{モモ}是^{モモ}辨^{モモ}す^{モモ}り余^{モモ}描^{モモ}する^{モモ}み^{モモ}史^{モモ}紀^{モモ}君^{モモ}往^{モモ}了^{モモ}渭^{モモ}簪^{モモ}の^{モモ}繼^{モモ}階^{モモ}の^{モモ}如^{モモ}一^{モモ}と^{モモ}云^{モモ}う^{モモ}ろ^{モモ}の^{モモ}戲^{モモ}云^{モモ}哉^{モモ}り^{モモ}と^{モモ}人^{モモ}を^{モモ}怪^{モモ}が^{モモ}せ^{モモ}世^{モモ}物^{モモ}も^{モモ}か^{モモ}う^{モモ}ふ^{モモ}言^{モモ}ま^{モモ}り^{モモ}是^{モモ}あ^{モモ}比^{モモ}翁^ウ也^{モモ}繼^{モモ}陽^{モモ}お^{モモ}は^{モモ}づ^{モモ}此^{モモ}場^{モモ}小^{モモ}懶^{モモ}王^{モモ}と^{モモ}は^{モモ}れ^{モモ}ば^{モモ}古今^{モモ}小^{モモ}繼^{モモ}階^{モモ}の^{モモ}よ^{モモ}ま^{モモ}之^{モモ}の^{モモ}ふ^{モモ}も^{モモ}難^{モモ}波^{モモ}の^{モモ}家^{モモ}園^{モモ}と^{モモ}停^{モモ}賀^{モモ}比^{モモ}櫻^{モモ}也^{モモ}あ^{モモ}う^{モモ}で^{モモ}ハ^{モモ}す^{モモ}と^{モモ}云^{モモ}は^{モモ}ふ^{モモ}天^{モモ}和^{モモ}二^{モモ}年^{モモ}武^{モモ}莊^{モモ}の^{モモ}宿^{モモ}舍^{モモ}又^{モモ}双^{モモ}す^{モモ}15年^{モモ}七^{モモ}十^{モモ}有^{モモ}八^{モモ}

井原西窓

井原西窓^{モモ}庵^{モモ}の^{モモ}梅^{モモ}の^{モモ}つ^{モモ}や^{モモ}一^{モモ}室^{モモ}大^{モモ}坂^{モモ}信^{モモ}林^{モモ}君^{モモ}一人^{モモ}あり^{モモ}一日^{モモ}遊^{モモ}育^{モモ}比^{モモ}社^{モモ}院^{モモ}小^{モモ}於^{モモ}て^{モモ}獨^{モモ}吟^{モモ}二^{モモ}萬^{モモ}三^{モモ}千^{モモ}句^{モモ}を^{モモ}吟^{モモ}く^{モモ}室^{モモ}あり^{モモ}二^{モモ}萬^{モモ}三^{モモ}千^{モモ}句^{モモ}と^{モモ}号^{モモ}「^{モモ}我^{モモ}翁^ウの^{モモ}す^{モモ}自^{モモ}源^{モモ}も^{モモ}は^{モモ}ぞ^{モモ}初^{モモ}慶^{モモ}平^{モモ}櫻^{モモ}や^{モモ}年^{モモ}あ^{モモ}く^{モモ}生^{モモ}る^{モモ}と^{モモ}是^{モモ}ア^{モモ}「^{モモ}去^{モモ}ね^{モモ}ま^{モモ}う^{モモ}く^{モモ}れ^{モモ}ゆ^{モモ}く^{モモ}衣^{モモ}ぐ^{モモ}「^{モモ}觸^{モモ}の^{モモ}急^{モモ}き^{モモ}と^{モモ}足^{モモ}里^{モモ}を^{モモ}阿^{モモ}至^{モモ}今^{モモ}夕^{モモ}北^{モモ}日^{モモ}「^{モモ}大^{モモ}嘆^{モモ}々^{モモ}定^{モモ}ま^{モモ}た^{モモ}世^{モモ}の^{モモ}室^{モモ}う^{モモ}家^{モモ}人^{モモ}あ^{モモ}と^{モモ}文學^{モモ}我^{モモ}は^{モモ}く^{モモ}唱^{モモ}る^{モモ}生^{モモ}文^{モモ}豪^{モモ}人^{モモ}翁^ウの^{モモ}か^{モモ}よ^{モモ}ある^{モモ}と^{モモ}妄^{モモ}慕^{モモ}す^{モモ}而^{モモ}小^{モモ}夜^{モモ}嵐^{モモ}一^{モモ}代^{モモ}男^{モモ}等^{モモ}は^{モモ}多^{モモ}紙^{モモ}後^{モモ}世^{モモ}」^{モモ}行^{モモ}つ^{モモ}近^{モモ}代^{モモ}戯^{モモ}作^{モモ}者^{モモ}の^{モモ}逸^{モモ}志^{モモ}を^{モモ}厭^{モモ}惡^{モモ}つ^{モモ}去^{モモ}つ^{モモ}ち^{モモ}の^{モモ}此^{モモ}門^{モモ}よ^{モモ}有^{モモ}る^{モモ}と^{モモ}い^{モモ}ひ^{モモ}傳^{モモ}ふ^{モモ}え^{モモ}縁^{モモ}中^{モモ}不^{モモ}殆^{モモ}不^{モモ}五十^{モモ}餘^{モモ}葉^{モモ}

椎本才聲

椎本氏字^{モモ}以^{モモ}文^{モモ}流^{モモ}達^{モモ}也^{モモ}高^{モモ}德^{モモ}翁^ウと^{モモ}称^{モモ}す^{モモ}は^{モモ}ド^{モモ}め^{モモ}西^{モモ}武^{モモ}つ

行く列武といひ至西庵グオ子うら一門の西丸すと西齋
こも梅翁の変を更てすり才磨と改より「風いあく梅あつ
う」た梅うあ「梅う唐又文ゆく歎や防賊子「れあう」近
て豊ま「義義うあ「雪本立いきう名」や山の唯住居いづれ也
年ふつ有けんにテ「本立」身せ居家又山を買うといつ
附向一た主附の能宗法源もそりみ此哉難さうと改て風
法源ハ此に在る太家強るに買山比肩する知げるに江戸在能源
忍すにあらばとを年の事ア又「益士も我買く亟う
ミ一北翁法源修人坐て「寢や角の年立内」や萬の風士
うて度過哉改ふをとくやいと種強といひむし一後灰室
取りえ文中ハ十二年第アて死たり

北條園水を才磨うつ子ア「も眼居士と号は生涯清を守

國中常矩ハ京旅居人「いさい」と号は牛序相良源のつすり一
季終の性年更風一て一樹を立川時より根に植く後林を立
ちふる者の大極母人の源ア「いづるとのく一年五百額巻額よ
樹木參り根の薄や暮比善ると縁どて根を參り根と称する
又「根石小三千の木檜紅色す」

父常長すと風波あり立川門ア「て松風影已号は「松の杖よ
ハ里一累や根麻木或ものふり根を此人の脚をうち生す
根隣み寄るく子とせり」

因代松翁 附 西友

因代松翁には女めん延室中、般若僧は住して、友人西友と公を合せ、該林野と号し、空調日く、小變化一文字の偈一句比餘賜了翁人を勸ほーむ。是故名く、該林龜舎と名く、「嶽ぐや否手の若者急済り、方舟や昔より、麻茎比骨のほひ空風よ、何うばれぞ皆人仰首こへまざる」是あの子と西友が功あり。お前極翁の東にする少遇く、すく徑く、十百餘巻を梓ほーほす。

江戸後林ちうんあまーとある堂

西友を伴出せん松園室つゞ寺オチム延室。江戸へ來て松翁

己力成合せんも、おほに城廬むへのおの隆安つけぬ念もぐふ

菅谷宣政

菅谷宣政を家漁翁人何物のつよ遊ぶるをちうば因勝江戸

小て壁んは該林野ひよそは右はゆきちみ事一て「未志事
れす」武源の想本をすと發句一て、匂ら想本をす。蓬松宣政
と名づるあく、古風な懶士と年高あく、起家「少代の松
かげせり、春の神うぐら「ねぐら」が入ん小漏は泥鰌、並びのみ又一風
家已稀一つなし

泄西言水

泄西言水は、東方の聲をもれ御風玄れあり、出川富儀了意社
翁就すと國玉雲と号はえ。歸抄寫名曰才小雲。ふをせよ
とほ、「本柏の果を河童うり、滿ち者語盡而意不盡可謂至妙
也す」とて本柏の云水と呼べよ。宜ちる。かく度うり因校ハ
之の山をよし、「尼寺よ唯葉れをのぞる。僅「子根」けく良の樹」
代形うり文抄く、竟附けり。雲水「布水」、亦よ人ふ「音」

お禁「古比奈や人よて遠代す變態不^{ナラ}大手可知後^{アシテ}」
あくに戸無^{アカサカ}を著^{ハラス}一社^{ハド}をく^{ダク}ゆく^{タマ}近曲集代撰^{ハシラ}享
保七年九月七十有三^{トモ}終^{タマ}るつと今^モ残^モ一木枝の句残
所^ハ墓碑^ハ詔^ハすといふ

伊家伝位

伊家伝位神名家尚棚材園と号^{ハシラ}は^{ハラス}居^{ハシラ}一和及我
志等^{ハシラ}と日夜^{ハシラ}お會^{ハシラ}一^ト御^{ハシラ}子^{ハシラ}修^{ハシラ}するより化^{ハシラ}り方^{ハシラ}でりよ
或日東武^{ハシラ}意^{ハシラ}房^{ハシラ}あり文^{ハシラ}を緒^{ハシラ}く上^{ハシラ}の風^{ハシラ}作^{ハシラ}い^{ハシラ}んと家^{ハシラ}
お^{ハシラ}あん^{ハシラ}人^{ハシラ}殺^{ハシラ}繩^{ハシラ}と飴^{ハシラ}で湯^{ハシラ}糰^{ハシラ}斗^{ハシラ}は^{ハシラ}お^{ハシラ}興^{ハシラ}か^{ハシラ}新^{ハシラ}一^ト句^{ハシラ}を作^{ハシラ}
詔^{ハシラ}く答^{ハシラ}一^ト兩^{ハシラ}挂^{ハシラ}り^{ハシラ}う^{ハシラ}代^{ハシラ}づ^{ハシラ}ば^{ハシラ}と生^{ハシラ}即^{ハシラ}知^{ハシラ}ぬ^{ハシラ}道^{ハシラ}
「^{ハシラ}士^{ハシラ}に^{ハシラ}漏^{ハシラ}三^{ハシラ}月^{ハシラ}七^{ハシラ}日^{ハシラ}八^{ハシラ}日^{ハシラ}古^{ハシラ}今^{ハシラ}題^{ハシラ}笑^{ハシラ}落^{ハシラ}作^{ハシラ}無^{ハシラ}出^{ハシラ}世^{ハシラ}篇^{ハシラ}右^{ハシラ}者^{ハシラ}可^{ハシラ}
称^{ハシラ}絶^{ハシラ}海^{ハシラ}名^{ハシラ}は^{ハシラ}今^{ハシラ}歌^{ハシラ}う^{ハシラ}は^{ハシラ}子^{ハシラ}も^{ハシラ}ほん^{ハシラ}音^{ハシラ}子^{ハシラ}いはく^{ハシラ}いげ^{ハシラ}よ

禪^{ハシラ}や人^{ハシラ}れ^{ハシラ}き^{ハシラ}の^{ハシラ}中^{ハシラ}と^{ハシラ}い^{ハシラ}る^{ハシラ}御^{ハシラ}衰^{ハシラ}き^{ハシラ}是^{ハシラ}ハ^{ハシラ}今^{ハシラ}年^{ハシラ}就^{ハシラ}申^{ハシラ}繕^{ハシラ}老^{ハシラ}殿^{ハシラ}
白^{ハシラ}氏^{ハシラ}の^{ハシラ}年^{ハシラ}を^{ハシラ}終^{ハシラ}る^{ハシラ}ひ^{ハシラ}時^{ハシラ}じ^{ハシラ}て^{ハシラ}老^{ハシラ}の^{ハシラ}津^{ハシラ}を^{ハシラ}は^{ハシラ}底^{ハシラ}一^ト三^{ハシラ}筋^{ハシラ}
り^{ハシラ}至^{ハシラ}來^{ハシラ}き^{ハシラ}宗^{ハシラ}の林^{ハシラ}を^{ハシラ}一^ト所^{ハシラ}著^{ハシラ}て^{ハシラ}大^{ハシラ}相^{ハシラ}う^{ハシラ}は^{ハシラ}一^ト神^{ハシラ}サ^{ハシラ}圓^{ハシラ}忍^{ハシラ}
や^{ハシラ}女^{ハシラ}老^{ハシラ}眼^{ハシラ}は^{ハシラ}比^{ハシラ}着^{ハシラ}み^{ハシラ}あ^{ハシラ}は^{ハシラ}備^{ハシラ}す^{ハシラ}一^ト密^{ハシラ}出^{ハシラ}か^{ハシラ}ひ^{ハシラ}よ^{ハシラ}の^{ハシラ}子^{ハシラ}
幼^{ハシラ}ある^{ハシラ}財^{ハシラ}久^{ハシラ}翁^{ハシラ}は^{ハシラ}身^{ハシラ}中^{ハシラ}翁^{ハシラ}の^{ハシラ}オ^{ハシラ}を^{ハシラ}鑿^{ハシラ}一^ト洋^{ハシラ}す^{ハシラ}小^{ハシラ}極^{ハシラ}比^{ハシラ}一^ト字^{ハシラ}
私^{ハシラ}て^{ハシラ}は^{ハシラ}翁^{ハシラ}致^{ハシラ}一^ト後^{ハシラ}の^{ハシラ}画^{ハシラ}武^{ハシラ}林^{ハシラ}は^{ハシラ}後^{ハシラ}一^ト宗^{ハシラ}ぶ^{ハシラ}御^{ハシラ}一^ト向^{ハシラ}
國^{ハシラ}成^{ハシラ}少^{ハシラ}こ^{ハシラ}せ^{ハシラ}り^{ハシラ}こ^{ハシラ}本^{ハシラ}年^{ハシラ}志^{ハシラ}べ^{ハシラ}く^{ハシラ}後^{ハシラ}林^{ハシラ}の^{ハシラ}候^{ハシラ}一^ト沙^{ハシラ}父^{ハシラ}君^{ハシラ}
作^{ハシラ}を^{ハシラ}更^{ハシラ}ば^{ハシラ}晚^{ハシラ}年^{ハシラ}眼^{ハシラ}を^{ハシラ}暮^{ハシラ}いて^{ハシラ}正^{ハシラ}風^{ハシラ}よ^{ハシラ}帰^{ハシラ}する^{ハシラ}こ^{ハシラ}ち^{ハシラ}ん^{ハシラ}享^{ハシラ}保^{ハシラ}七年
十一月六十有^{ハシラ}餘^{ハシラ}一^トて^{ハシラ}双^{ハシラ}に

三^{ハシラ}め 附^{ハシラ}燈^{ハシラ}中^{ハシラ}

三^{ハシラ}めを^{ハシラ}樂^{ハシラ}極^{ハシラ}の人生^{ハシラ}實^{ハシラ}和^{ハシラ}奇^{ハシラ}を好^{ハシラ}て風^{ハシラ}流^{ハシラ}何^{ハシラ}り^{ハシラ}極^{ハシラ}ま^{ハシラ}
美^{ハシラ}津^{ハシラ}め^{ハシラ}放^{ハシラ}放^{ハシラ}の人生^{ハシラ}實^{ハシラ}和^{ハシラ}奇^{ハシラ}を好^{ハシラ}て風^{ハシラ}流^{ハシラ}何^{ハシラ}り^{ハシラ}極^{ハシラ}ま^{ハシラ}

作家奇人

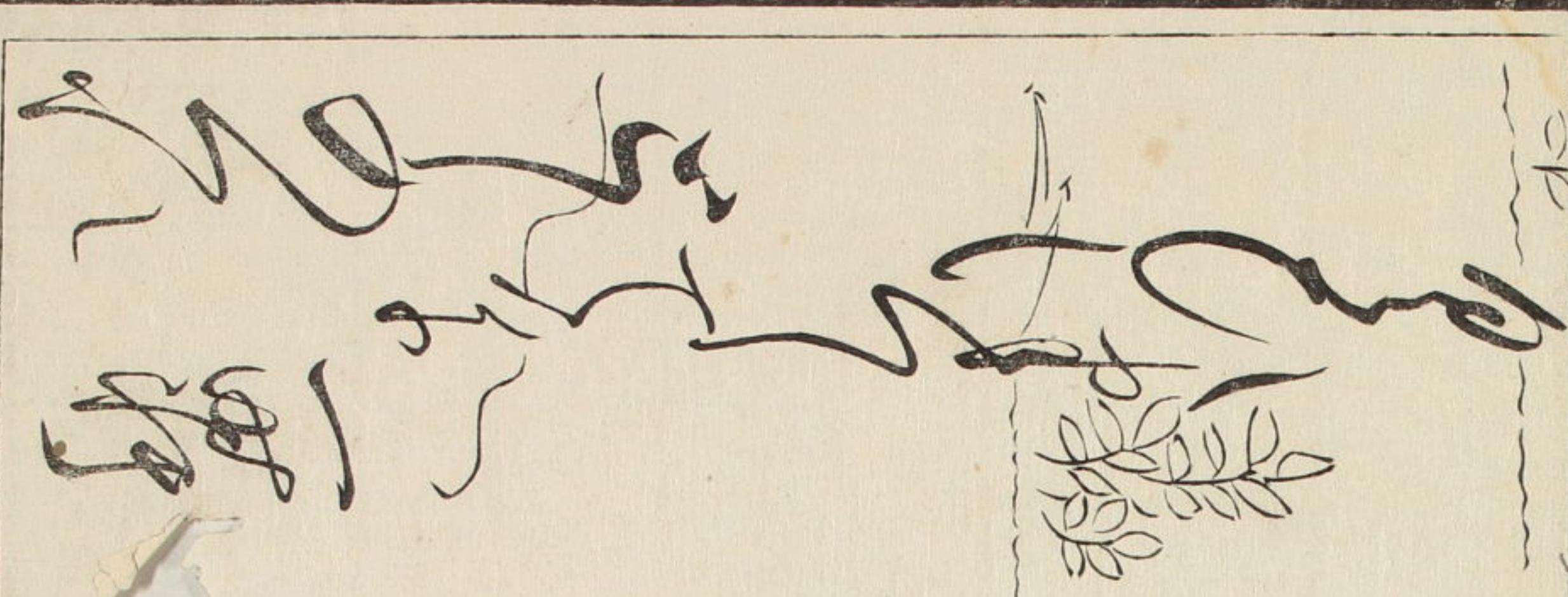
卷之二

十一

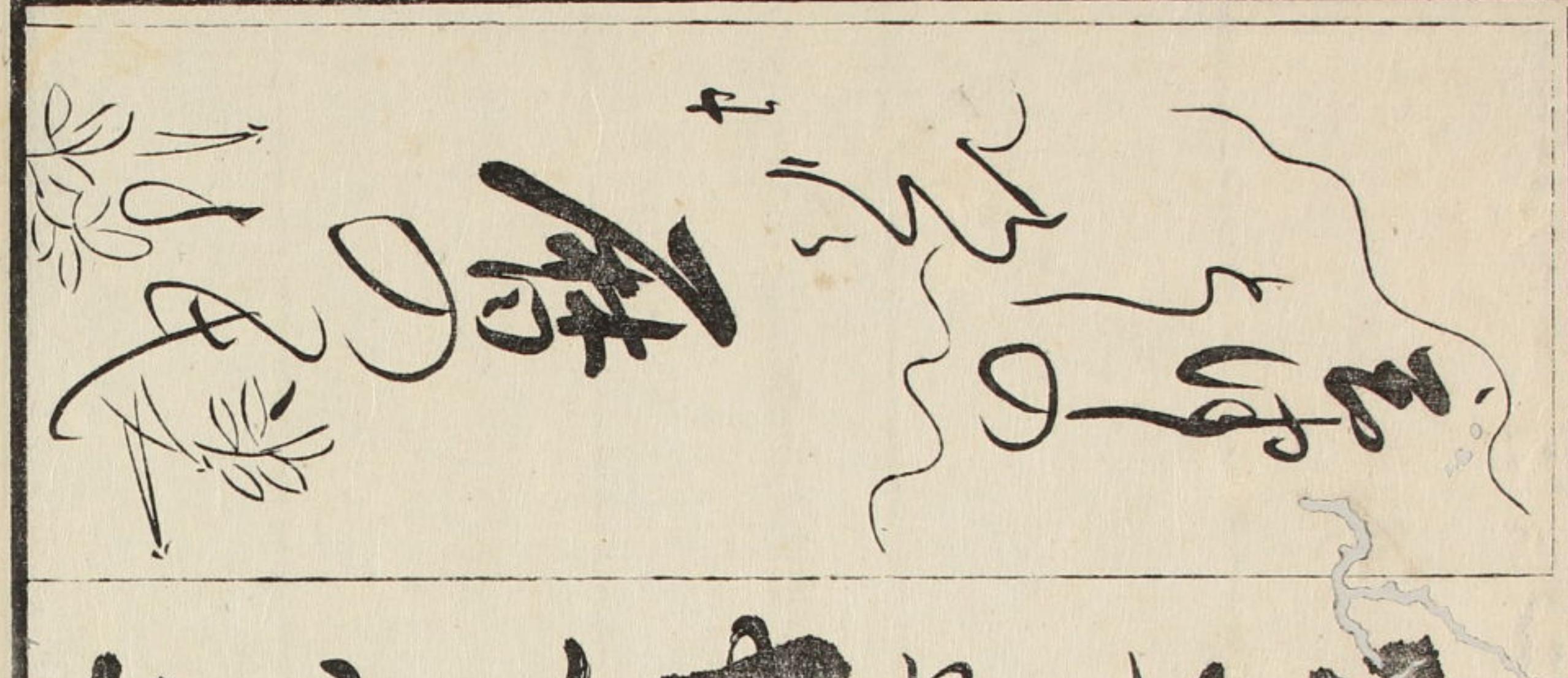
非家奇人淡

卷之三

十一



This image shows a page from a traditional Chinese calligraphy book. The page is filled with a grid of Chinese characters written in a fluid, cursive style (caoshu). The characters are arranged in approximately five rows and six columns. Each character is composed of bold, expressive brushstrokes. The paper has a light beige or cream color, showing some minor texture and slight discoloration or foxing, particularly towards the edges. The overall appearance is that of a well-preserved historical document.



This image shows a page from a traditional Chinese calligraphy book. The page is filled with a grid of Chinese characters written in cursive (caoshu) or semi-cursive (caoshu-like) script. The characters are arranged in approximately four rows. The first row contains characters like '之', '也', '而', '之', '也'. The second row contains '而', '之', '也', '而', '之'. The third row contains '也', '而', '之', '也', '而'. The fourth row contains '而', '之', '也', '而', '之'. Each character is composed of bold, expressive brushstrokes, demonstrating the fluidity and variety of cursive script. The paper has a light beige or cream color, and the overall appearance is that of an aged, well-preserved document.

櫻翁同時晉子が山茶の事と異曲同工不知何先手をせぐ
おゆく妻の筆者あ「石と云ふ聲をばらす」墨あ「有裡
比仲達翁至て紙子うるを是る女流の興象はと称す」と
悟中かに残あく後はよ徳すれどもに於て妻妻である
或的意氣ひ揚して来るに吹すからく徳振く寛容徳す爾
至めり詮恭つゝれ河底を感じて「山茶や圓みちく不る
塵もす」至め振りて「紅葉のあ戎宿は招内官署支拂て
より東國へ下す爲了隨後す爾又て後へ又晉子は徳く
はあべ一年旅立て余清を逍遙一徳に戻へ遼寧渾門より左
往して眼科を取く醫の聲とほ友人琴風が記すく此女も
ク一すり世事に躊躇く徳下空五指残切く下弦の音絃を觸く
強文厚化養成多き水奈が一ふ用ひたんと持て志後くとも

おれゆき風雅のうれ興を嘗みしを知は佛道の
天窓れ多きれども中を十筋ばかり残す所も可矣一乞
ハ唯一君むく城邊の城主一初のぬき若ゆ人得程も惜乃
せ一トモや匂ら雲虎和尚は答ふ出す
來出の姫君不す本末不忘ひ方正君相源達也ねず
而身はあぐり跡をばいへ心源院よよての不退軒を繰り往
ふる唯この便にて若か匂をいひ音哉纏く遊やくゆるより
せ益比に業すば一切經も業益の口業みてく法身を
燐はく我平生乞ひ乞ひと匂とすとす極ゆくゆく
よだ御く燐るに因出く一和其聲自己念其不覩心清
燈已燐一燈心東中默々有明鏡全識入肉清淨心海うさん達
う知度紀有う所不眞あた事ふ色ありぬ法也より

をやさ柔すぐる此の娘一と享保八年六十歳アリて名後知義
ニ改め冠里公内尊君人トは向く十一年に月六十有三アリテ
死に辞世「扶杖月夜の驛石一官の裏り取り草葉の孫地松
園西氏の子の娘あら人はドメ金つ又学ぐ一有とのひ後梅翁
み後てより惟中と改せ一時軒と号す「玉翁や松々はドモ全
美也因「とく寂くなるん風せ山櫻をそくせ梅翁復了達
翠たれいあざ振ある衣づく扶翁より聲を業てて難波又
遊焉り又出徒能して毛名嶽の聲ゆえ藤又年又歿

よ高寒雲

よ高寒翁の孫が仰母の人計耕を畠く漁翁又遠の家を守して
資用ふと一或人のつ女越權貴比妻又妻んす城すとむ義を
すく此を園辞すを性の嚴正なるお率教の娘一扶翁或也

慈つ海國と悪事を行ひ又亡び君法令を財ぐあひ
いふの太いまほ安堵あり漁翁は自愧滿を重ね又はふんで
奥葉といふ元藤京保比百束山と居行て名四才又吟ゆ
武財穂を成一間せしゆく「庭あふふく咲くる山茶うか是端
的機縫何減栢樹子も皆君の名を「津也」津也つ寐ぬ承
然情駄面「寝ひすとをぐゆぢやと云れり「みよつ月里と秋の
音をよゆて五土井の世向雄澤傳李青蓮風骨「夕立の又や何事
竹絃はうせ「引水の捨てて出でて「麦子のや殊ぐ湯を
頬くふと「物すとや何と面白はぬ多天性禪湯アリて詮絃子
隔うほん名又詮絃するより初めだ一對はドメ司祀していき
己二十小濱ばるにせんめ松江の翁と梅翁別をの今よおろく
「ちよこゑふハ近れむき一吉野山とのふあらよ「獨に禪を下す

ぬらくに附り、執筆より吉盤山又執筆の在りてやと智られ
高頭にて吉盤山名の盛茂は孫といふ、雅氣はけへばだより
りそりとも古事記にあをりは里と云あぐる名前をあげむ
くは彼玄旨法市うも劣らぬ才力感ずるに餘何り抑あも此子
葉底くる葉以下もの鄉愁を連じのち、宦あるうる候年
比玄祖くある成一年誠の毅契よて蕉翁の行持するに鑑て
「くるくねと初めがる一祚おく重慶年図より、居士而爲
称すりえ文三年ふ終宿

小西東山 論

小西東山とて、徳高とひま風貌が懷の產せんかすり父母姪
親孫代るよ寄育せし、はるよ化す後勤めず只出残後さとを
好む時不對平遠く而て和子こちに至穎敏ふるつを嘗く

十載懐跡いまと二十あぐる事をまく、回家とゐる十載
紫云号す中禁宮林の翹楚、て古今よ名代也。——達人ぶり
「元因やれれば跡内比水のあ興象國美」三味猿毛小奇すれ
らば梅茗の精確「走」つてむ一つてへ捨はる比空園めう喜
比付よやよ及ばざ「茶喫」てとむひじらぬふ徳玄詔定「友
川や竹で足ふく筋あり涼けみに揚を口に後すらり二方見掛
可稀合作、「子窓ぬれく、將子ひう内あり、嘯山のすく林間、一束
鐘「松せき枝子拂」つはつたり、乘興自在「神泉」と曰
何うそふ秋と感ふる重慶山いぢく以温雅、調寓悲憤、思果
爲潔作「我物と被学り、アモ言ひ、かを天淵殊語と
女人形の記す「小野すもお匂り、深田子の記ス萬一、此隆也ハ長

乃ばかり産して猿息みかくは今亦三十萬石を秘す而
といふ蓋一西宿舊地を拵えたりて是より此叟シシウが奇正
にて古今残縫措すあらぬむ役マヨをす要するに西山の一流
せん坐てより後世不^シ大國シテありゆるぶ店

前川由平を楠翁の弟子として東山ヒガシヤマにあり歷年親よて
自入と改むを作多くアビ「吟や三日比月はく今日の阿山姥アヤマタチ
がむらぬ山や雲が墨室紙申ほの風也時々效

施事あへ候事も上経

